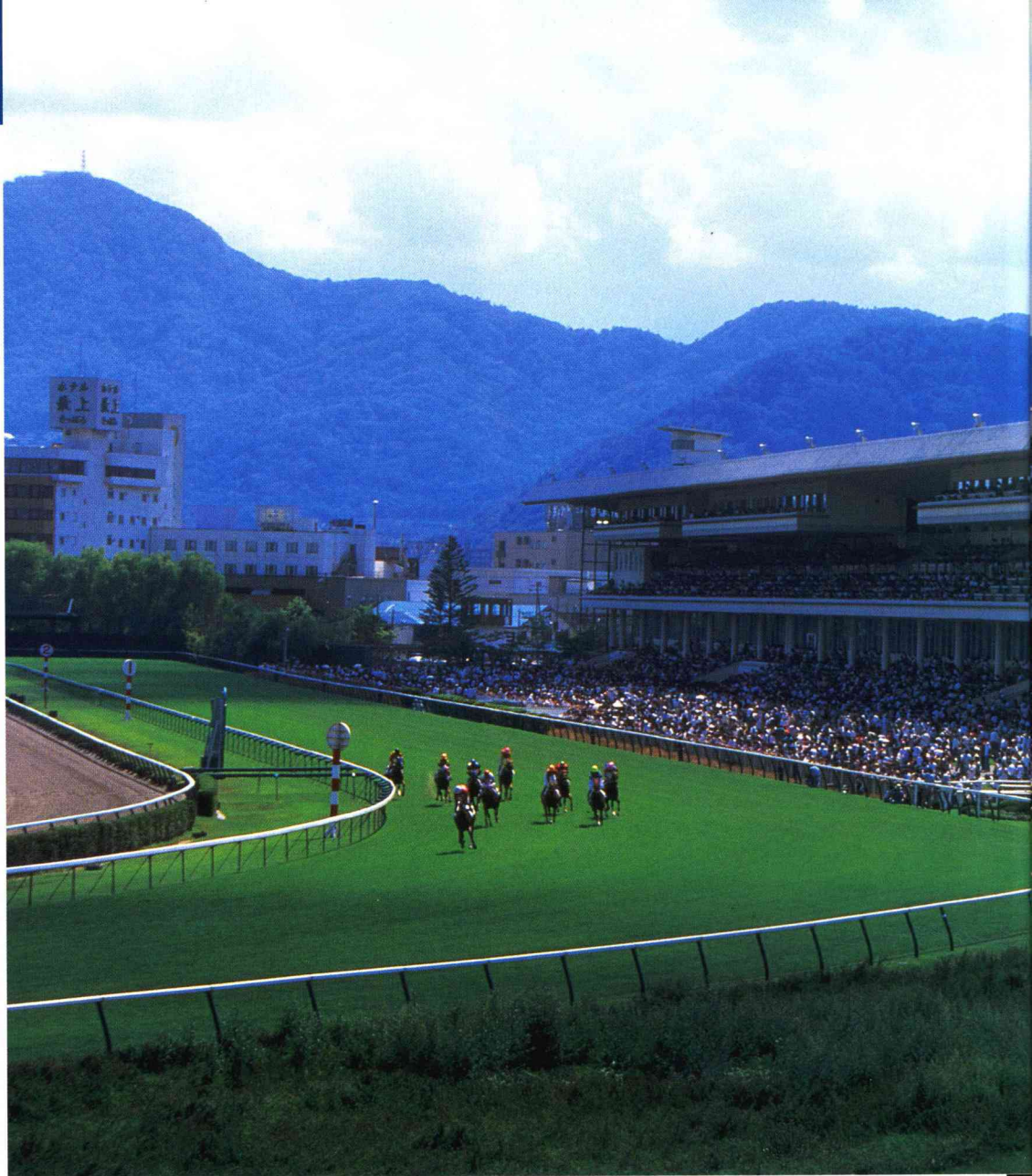


大地を駆ける鉄
北海道



Steel Landscape.

国内における馬の産地といえば北海道。
今回は、長い歴史を通じて人間ともっとも親しい友であった馬と、
蹄鉄にスポットを当てる。



一般的な野芝の北限を越えるため、札幌競馬場では洋芝が敷かれている



競馬は「血のスポーツ」といわれるほど、馬の血統が重要視される

馬の故郷としての北海道

ある青年が美女に恋をした。それを成就するためには、青年は二輪戦車競走に勝たなければならない。そこで青年は、馬を守るとされていた海神ポセイドンに相談する。同情したポセイドンはこの青年に、金の二輪戦車と翼のある馬を贈った。青年は勝利を取めた……。ギリシャ神話の一節である。

この神話に因み、オリンピアに競馬場が造られる。初回オリンピック競技（前 776 年）から、競馬は祭典に欠かすことのできない競技となった。

競馬が人気だ。競馬場の雰囲気も大きく変わったといわれる。若い女性が増えたといわれ、テレビCMでは人気俳優が競馬の魅力を語ったりもする。神社に奉納する競馬は江戸時代以前の日本にもあったが、西洋式のものは江戸末期、居留していた英国人が横浜に競馬場を建設してからだ。そもそもサラブレッドをつくりあげたほど馬に熱心な英国人である、それまでに居留したさまざまな土地に競馬場を建設していた。コロombo市内、ヒマラヤ高原、香港、上海……。日本の競馬もまた、彼らに教えられてその黎明期を迎えたのである。

現在、日本の競馬は、中央競馬と地方競馬に分かれている。

中央競馬が開催されるのは、全国10か所。その中でもっとも北に位置するのが、札幌競馬場だ。1周約1マイルの右回りコース、レースが少ないせいもあって芝のコンディションのよい馬場として知られている。

中央競馬の主要なレースには、それぞれグレードが設けられている。ちょうどプロ野球が一軍、二軍というようにクラス分けされているのと同様に、それぞれ馬は、そのレベルに合ったグレードのレースにしか出場できない。もっともグレードの高いのがGⅠ（グレードワン）、以下Ⅱ、Ⅲとつづく。ここ札幌で行なわれるのは、GⅢのレースだ。札幌スプリングステークス、そして札幌3歳ステークス。競馬自体にはシーズンオフというものがないが、札幌は北の地の不利もあり、主要レースは夏期にこの2つを開催、のべ16日間行なわれるだけだ。しかし、すべての馬は北海道という土地と因縁が浅くない。馬は暑さが苦手な動物であり、だから繁殖は主に北海道で行なわれる。現役を引退した馬もまた、ここへ戻ってくる。ここで生まれ、ここに帰る。北海道は、闘いを終えた馬にとって、気候のよい、過ごしやすい故郷でもある。



豊潤な大地、北海道のじゃがいも畑

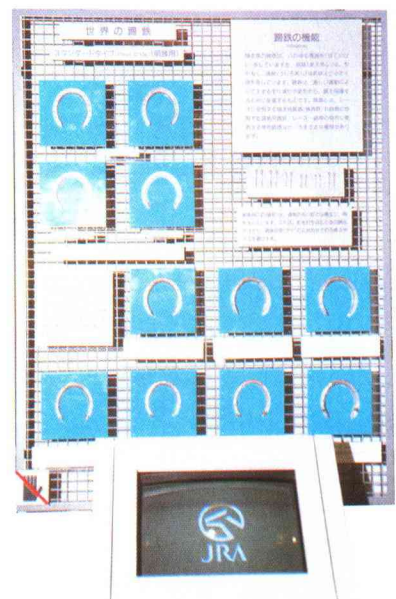
蹄鉄の、魔物を払い除ける力

犬とならんで、馬は人類のもっとも古い友であった。6千年ほど前にシベリアやモンゴルの騎馬民族の間ではじめて馬の飼育がはじまったとされ、以来馬たちは、多くのものを迅速に運び、遠い旅を可能にし、また農耕地を深く耕すことに貢献してきた。そんな馬に対して、蹄を保護し、より長く働いてもらうために「鉄の靴」が考案されたのは、紀元1世紀、ヨーロッパの北方民族によってだという。蹄鉄以前にも、馬の靴はあった。鹿皮をついたり、樹脂を塗布したり、古代エジプトでは編み物をかぶせて保護をした。日本でも明治時代までは馬にわらじを履かせていた。これはきわめて耐久性に乏しく、二里ほども行けばすり切れてしまった。それで、何度わらじを取り替えたか、その回数で距離を計るめどにしたりもしたそうだ。

明治に入り、まず軍隊が蹄鉄を正式に採用し、やがて同20年ごろには一般化してくる。現在の蹄鉄は鉄だけではなくアルミニウム合金も使用されており、これらは馬の特性や用途に応じて選択されている。

蹄鉄にはいろいろな言い伝えがある。アメリカの家で蹄鉄をドアに打ち付けるのは、Uの字の蹄鉄が、上から入ってくる幸福をこぼさない形をしているからだ。他国でも、蹄鉄はお守りとして扱われることが多い。真っ赤に熱した蹄鉄を馬の蹄に押し付けて小釘で打ち据える、この時、蹄が焼けてひどい音さえ立てるのに、馬は痛い顔ひとつしない。蹄は肥大した爪だから当然、痛みもないのだが、蹄の正体を知らなかった時代の人たちにとっては、痛みから人を遠ざけるおまじないのようにも見えたのだろう。また、蹄鉄は鉄でできているということも、迷信を深めた。鉄は魔物を寄せつけない魔法の物質だ、邪悪を払い除ける力がある……。

こうした迷信やエピソードの豊富さが、人と馬との深く長い付き合いの歴史を語っている。今、わたしたちは競馬場でしか馬と接することがないといっていいほどだ。馬車をひき、耕地を耕し、つねに生活をともにしてきた馬。自動車が「鉄の馬」と呼ばれはじめて、ついに本物の馬は道路から姿を消していった。身のまわりからも消えていった。寂しいことだが、これは、友を失ったに等しいといえる。



日本人がその存在を知りながら、長い間蹄鉄を取り入れなかった理由はさまざまだ。日本の在来馬がもともと蹄の固い種類だった、国内の道路状態が良好だった、蹄鉄をつくる技術、装蹄の技術が難しかった、などが考えられる（写真提供：JRA競馬博物館）